

## 種 感

### 地方研究と現地協力者

(仙臺) 竹内 利美

社会学・経済学・宗教学などいわゆる社会諸科学の立場をふまえての現地調査研究は、社会戦後、ようやく本格化したにすぎないが、その後の進展は去ことにめざましい。今年あたりも、東北の各地には、それぞれの筋から大小の調査団が入りこんできて、場合によつて現地での鉢合せも生じ兼ねない有様である。

ところが、こうした地方の村々を舞台とする調査研究では、社会学などは全般的な新顔にすぎない。すくなくとも、正統派の地方史研究、考古学の発掘調査、人文地理、あるいは民俗の調査研究といつたものに比べると、現地の人々には一向に馴染のうすい存在である。たいていの場合、現地調査の窓口になつてゐるのは、まず各県におけるそれぞれの部門の研究の元締格の人であり、ついではその線につながる現地の人々、一主としては教職関係にある地方研究者といふことになる。そして地方研究に年季の入つてゐる分野では、直接協力できるこうした現地の人々を得るのに、そう苦労はない。郷土史、郷土地理、考古学、民俗学などの地方研究家は、たいていどこにも然るべき者が居られて、しかもは料莫然の点では、新來の研究者の短日月の探察等は、及びもつかぬのがむしろ通例であり、少なくとも資料の所在を指示して頂く便宜にはこと

欠かない。私達の現地調査の窓口も、だいたいはこうした練で、もちろん調査企劃をはぶけるに、それらの方には有力な仲立となつて頂けるし、また有益な教示にも預つてある。しかし、専門のくいちがうことは、その協力場面にも、何か一つ誤を隔てたような感じを拭しきれない空氣を自然生ずる。生々しい現実を対決することが多いだけに、私達の研究も単に私達だけの間に押込めておかず、できたら現地の一級の人々と一緒に問題を考える広場をもちたいという念願は、おそらく誰しもが抱くところであろうし、またそうでなければならまい。それにはいろいろの近接方向が考えられるにしても現地調査の窓口に立つ仲立人に適当の人々を得ることは、何といつても、大きな利点である。

この春仙台でも村研関係の連中の集まりをしてみたが、その範囲はほとんど同じ大学内を出ない。そうがといつて、この範囲をひらくするには、さしすめ打つ手もない。東北社会学会も仙台中心に組織はできたが、そこでも同じ做みはある。仙台以外の各大學でさ現状だから、それ以外のところにまで、漫遊させるのは、全く容易ではない。村研の生れた素地も、考えてみれば豊富に述べたよくなれど、そのメンバーを募るにはきわめて窮屈な

毎年どこかの地方に出向いている。そうした場合の現地協力者を個人的にでも、できるだけつなぎとめておいて、やがてはその組織化を一緒に考えるように運びたいものである。私達は村の問題を出来るだけ村の人々と一緒に研究し考えてゆきたい。すぐなくとも、現地の協力者を單に、当座の足踏りとして使い放なすことは敵に戒めたい。そして村研の太る裏地の一つは、こうした現地で得た同志を徐々にせよ、ひらく結合してゆくところにある。思われる所以である。